

月の花挽歌 ～8. 人情紙風船～

8 - 3

多少の事では動じない真紀でも半端ない個性豊かな面々が顔を揃えると、目配り、気配り、心配りで腋の下にじんわりとかく汗で肌襦袢が次第に湿り気を帯びてくる。

そうかと言って、その人々のおかげで横田との揉め事でうんざりしていた空気感が取り除かれたわけだから、真紀にしてみれば救いの神ともなるのだ。

真紀が横田の様子をうかがうと、心ここにあらずの状態、辞するのに最適なタイミングを掴めないで焦燥感に駆られているのが透けて見える。

「横田君、今度映画を撮るんだが、タイトルを担当してくれませんか？」とTは問いかけて、画家を話の輪に引き入れようとした。

「タイトルですか？」と不意を突かれた横田は、Tの言っている趣旨が呑み込めなくて聞き返した。

「芸大の君の先輩で画家の高塚省吾を知っているかな？」

「……知りませんが」と横田は少し間を置いて答えた。

「芸大は数多の画家を輩出しているし、彼は油画専攻だから無理もないか……。Kさんをご存知ですよ」とTはKが知っているのが当然とばかりに尋ねた。

「はい、小津安二郎監督映画のタイトルを何本か担当なさった方ですよ。撮影所で紹介されたこともあります。私と同世代のせいもあってか話が合いました。高塚さんが描かれた裸婦の美人画は、油でもパステルでもとても印象的で好きです」

Tはタイトルの話に興味を示さない横田に内心失望したけれど、素早く表情を読みとって、それ以上はその話題に触れなかった。

「Tさんも人が悪いですね。次回作を準備していることなど初耳です」と俳優が不満顔で言った。

「そうですよ、概要だけでも教えていただけませんか」と女優も単刀直入に言った。

「私も興味がありますわ」とKは穏やかな笑みを浮かべて追従した。

三人の看板俳優にせがまれて、満更でもない様子を見せていたTは、真紀に新たに作ってもらったコニャックの水割りを一口飲んでから、おもむろに新作の構想を話し始めた。

「今から半世紀以上前の昭和十二年に公開された山中貞雄監督の『人情紙風船』をリメイクする準備を進めている……」と言ったところで一呼吸置いた。

「素晴らしい企画ですね！クランクインの予定はいつごろになりますか」とKは身を乗り出して、話の続きを急かせた。